生死の教え

生死はままならぬといえど生死は心のままである。兄弟を生かす心の者は生き、兄弟を殺す心の者は死す。殺すというても刀で斬ることではない。兄弟を生かす心のないものは殺しているのである。周囲の人々の思わくを生かしてやるのは「兄弟を生かす」の最も大なるものである。自己の好まざるところを他に転嫁するは「兄弟を殺す」の最も大なるのである。周囲に痰を吐き散らすな、紙屑を投げ捨てるな。これは物質のことでもあれど、物質のことだけではない。口角沫を飛ばして兄弟を批難する者は兄弟の心に唾を吐きかける者である。腹立ちを手紙に書いて送る者は兄弟の心に紙屑を投げる者である。かれは兄弟の心を言葉で殺し文字で殺す者である。兄弟の心を殺すよりもなお大なる殺しがある。なんじの両親の思いやりを殺し、なんじの主君の思いやりを殺す者である。本当になんじが、心の殺人を止めて感謝の心に充たされるようになるまでは、心の波長が異うから神の救いの霊波は受けられぬ。

（昭和六年九月五日　神示）

第一章　「生長の家」より観たる「創世記」

一

○神、光を善しと観たまえり。神、光と暗を分ちたまえり。神、光を昼と名づけ、暗を夜と名づけ給えり。夕あり、朝ありき。是れ首の日なり。

（『創世記』第一章―四～五）

大きくこれを観れば神の「宇宙創造」、小さくこれを観れば、人の「人生」はいずれも、「暗」を征服して進む「光」の行程であり、「死」を征服して進む「生命」の歴史であります。「生命」の進むところ必ず「光」があり、「光」の進むところ必ず「生命」があり、生命とは神から放射された「光」にほかならない。そして神は善であるから、「生命」のあるところ、「光」のあるところ、必ず「善」である。これが「神、光を善しと観たまえり」の真義であります。

太陽の創造はまだ『創世記』第一章の後節にありますので、ここに述べられた「光」というのは物質的太陽から放射する「光」ではないのであります。これはむしろ「大生命」すなわち法身の天照大御神の聖光であります。すべての創造は「大生命」すなわち宇宙の唯一根元神から放射される霊的観念によって造られる。したがってこれは善なることのほかはできないものであります。悪なる存在があるように見えるならば、それは本当の実在ではない。存在するものらしく見えるものにも、本物と偽せ物とがある。この本物と偽せ物とがあるということ

を「夕(ゆうべ)あり、朝(あした)ありき」と象徴的に書いてあるのであります。太陽創造以前にある夕と朝、夜と昼とはこういうふうに解釈すべきものだと啓示されています。

生命の實相　谷口雅春　日本教分社